

この本を薦めます

学会誌編集委員長 佐々木 葉

第11回



佐藤 馨

北海商科大学教授

今月は、偶数月の学会誌月評をご担当いただいている佐藤馨一先生です。北の大地から国土への熱い思いを語られ続けている先生から、本質を見定めよという3冊をご紹介します。

東

北ご出身ながら北海道をこよなく愛し、中央から無視され

ようともひたすらその土地からの発信を続けてこられた佐藤先生は、インタビュ어의前週には日露フェリー促進協議会会長としてサハリンに行かれていた。領土問題が取りざたされる中、日本とロシアの関係を人との交流促進から考えることが必要と佐藤先生は考える。その際きわめて重要なロシア観を提示した本

として司馬遼太郎の『ロシアについて』を挙げられた。シベリアという

広大な領土のロシアにおける意味を、モンゴルや中国との関係を深く洞察しながら示す。その上でロシアが日本に何を求め、それに日本はどう対応してきたのか。史実のピックアップが伝える国の転変のみならず、民族や人物の気質の鮮やかな対照にもおよぶこの本は、文明と文化、国と国民、政治と外交といった国土計画に



SATO Keiichi

写真は是非ここで指定されたのは札幌駅近く、背後にJRの高架が見える場所。「ここに20年後に新幹線が通るのです。」1944年青森生まれ。専門は交通計画学、土木史学、物流システム論。

不可欠なものを見方を大いに刺激する。27年前に書かれた本ながらその指摘は今こそ参照されてよい。

次の『人はなぜ逃げおくれるのか』は、佐藤先生が大学でリスクマネジメントの講義をする際に副読本とされたものである。阪神・淡路大震災を直接のきっかけとして書かれた災害心理学のこの本には、実は安全という言葉が一度も出てこない、という。安全、つまりノーリスクという状況は現実にはあり得ないのに、その言葉を使ったとたん何となくそれが実体化してしまいう危険がある。土木の設計の安全率という言葉も誤解を与えはしないか。パニックも含め、何となく使われている言葉を吟味する必要をこの本は気づかせてくれる。

リアム・ホイラー』は、真の人材教育とは何かを考えるために、と挙げていただいた。北海道大学といえば「少年よ大志を抱け」のクラーク博士が有名だが、明治の大人物らを実際に育てた札幌農学校の教育者はホイラーであることはほとんど知られていない。本国でも非常に尊敬されたこの若きエンジニアに迫った本書は、通説が時に空虚であることを出している。事実から始めること。理念や概念を示せばものが解決したように思いがちなのを流さず、これはなぜなのかを粘り強く考えつづける。佐藤先生の計画思想の礎を少し拝見することができ、嬉しかった。

ロシアについて
—北方の原形—
司馬遼太郎：
文春文庫

人はなぜ
逃げおくれるのか
—災害の心理学—
広瀬弘忠：
集英社新書

お雇いアメリカ人
青年教師 ウィリアム・ホイラー
高崎哲郎：
鹿島出版会